

《企画書》

提出者 PAPA-SAN (塚田和幸)

【タイトル】 Thank You Daddy! ～どんなに離れていても、きずなは結び愛う～

【概要】

本書は、出生のトラウマのために、人を愛することができなかった起業家が、娘から無条件の愛を表現されることで、真実の愛に目覚め、人としてのこころの絆を取り戻していく物語です。著者の実体験に基づいたフィクションです。

【想定する読者ターゲット】

- ① 30～60代の男女 ② 家族関係で問題を抱えている人 ③ 人生に行き詰りを感じ苦しんでいる人 ④ モノに満たされれば幸福になると思っている人、または、その逆の人。

【構成案】

Thank You Daddy! ～どんなに離れていても、きずなは結び愛う～

第1章 マイ・マミーズ・デッド

この章では、釈尊のいう人として生まれる苦しみ「四苦八苦」のうち、「生・老・病・死苦」と「怨憎会苦（憎む人に会う苦しみ）」について記述しました。

「生苦」：娘の誕生。「老・病・死苦」：母親の介護、卵巣がん、安楽死の選択。

「怨憎会苦」：相続をめぐる親族との争い

第2章 ハード・ロックダウン

この章では「愛別離苦（愛する人と離れる苦しみ）」について記述しました。

家族で暮らすための、日本滞在ビザ申請中に突然政府によるロックダウン令が出され、渡航禁止となり、家族は15カ月の間離ればなれとなってしまいました。

第3章 出口なし

この章では「求不得苦（欲しいものが手に入らない苦しみ）」について記述しました。

パンデミックにより、所有するホテルの運営会社が経営を放棄して収入が途絶えました。

第4章 無力に生きる

この章では「五蘊盛苦（心身が思うようにならない苦しみ）」について記述しました。

主人公もコロナに感染したため自宅で一人療養中、肺炎を発症し死線をさまよいました。

第5章 放浪

終わりの見えないパンデミック。彼はどこまでも続く孤独地獄の中で、生きる目的を見失い、悪疫退散を祈願するために死出の旅路、四国八十八カ所の歩き遍路に旅立ちました

第6章 救済

2歳になった娘が野良犬にかまれました。発症したら致死率100%といわれる狂犬病の恐れがあるという。彼は領事館と交渉して特別にビザを発給してもらい渡航しました。しかし、長期に渡るロックダウン下の生活で、妻子は無反応のうつ状態になっていました。

第7章 ホーム・スイート・ホーム

彼は妻子への心のケアを始めましたが、心の距離はなかなか縮まらず、彼は疲れ切って「別れた方がお互いに良い」と考え始めていました。そんなある日、かつてのように娘がハイハイしながら彼の胸の上を登ってきて、突然首に抱きつき「Thank You Daddy」と言いました。その瞬間、彼の中で大きな変化が起き、涙が止めどなくあふれ出てきました。

【サンプル原稿】（要約）

Thank You Daddy! ～どんなに離れていても、きずなは結び愛う～

彼はサクラ色の縁取りの遺影を見つめていた。縁取りが黒ではないのは、葬儀屋が勧めたからだ。彼の母が卵巣がんを告知された時に、彼女は延命治療を嫌がった。

「もう 84 歳だし、十分に生きたから… 痛い思いはしたくない。」

それが、彼の母親の最期の願いだった。

在宅での介護生活は母親にとっては安心感があったが、彼にとっては、苦悩の日々だった。母との二人暮らし、突然夜中に鳴り出す呼鈴が気になって熟睡できない日々が、1 年近く続いていた。彼は海外視察中に妻と出会い、現地で子どもを出産した。そのため、介護の合間を縫って、海外に住む家族に会いに行っていた。多忙を極めていた。姉が 2 人居たが、必ずしも母の介護に協力的ではなかった。

母親の最後の時は深夜に訪れた。すでにガンは全身に転移していて、常習性があるという鎮痛剤による緩和ケアが行われていた。母の意識は朦朧としていた。担当医から呼び出され、あと 2, 3 日が峠であると聞いていたので、彼は寝袋を持って病室に泊まり込んでいた。少しうつらうつらとしかけた時に、アラームが鳴った。脈拍の数値が弱くなっていた。彼は心臓マッサージを試みた。薄くなった胸板は、簡単にあばら骨が折れてしまいそうなくらい弱々しかった。脈拍は少し落ち着いてきたが、今度は血圧が下がってきて、呼吸が荒くなってきた。彼女の口は海岸に打ち上げられた魚のように、パクパクと断続的に動いていた。明らかに苦しそうな状況だった。そして、ゆっくりと血圧は下がっていき、口の動きもゆっくりになっていった。心臓マッサージをする手の動きに合わせて、脈拍の数値は動いていたが、他の数値は 0 を示したままだった。死の瞬間を、「息を引き取る」というが、確かにゆっくりと息が途絶えていった。悲しみの涙は出なかった。少しホッとするような気持ちもあった。一方で母親があまり苦しむことなく往生できたことに、心の中で「これで良かったんだ…」とつぶやいていた。中学生の頃図書館で聞いたジョンレノンのマイ・マミーズ・デッドの歌詞が頭の中で鳴り響いていた。“I can't explain… So much pain.”

次姉に電話をかけると、明日銀行の仕事が終わってから、そちらに向かうと言った。大体何時ごろに来るのかたずねると、今はちょっと分からない、たぶん遅くなると答えた。意外と冷たいものなのだなどと、孤独感が広がっていった。母親の葬儀の手配も、彼一人で行った。葬儀屋には望みどおりに往生したので、あまりしんみりとしたものにしないでほしいと伝えた。おそらく母もそれを望むだろうと彼は思った。そして、葬儀屋は、サクラ色の額縁を提案したのである。葬儀場は母の好きだった宝塚の「すみれの花咲く頃」が流れていた。きれいに死に化粧を施され、棺桶に横たわる彼女の周りが、色取り取りの献花でいっぱいになっていく。母の友人たちの無数の嗚咽の音が、堂内に響いていった。

彼の娘はまだ目が見えない。母親のサクラ色の遺影と骨壺の前で、寝転がって虚空に向かって両手を振りながら、微笑みかけている。母が入院していた頃を思い出す。妻の実家に行くときは、必ず娘の成長姿をビデオに収めていた。母に見てもらうためである。まつ毛が長く黒目が大きな孫の目を不思議そうに眺めながら、「あなたに似なくて良かったわね、でも、他はあなたそっくりね」と母親は言いながら、孫の出産を喜んでいて。そして、なぜかゆっくりと白目を向いて意識を失っていった。鎮痛剤による幻覚を見ているのだろうか、何かを夢見ているかのような、穏やかな表情でゆっくりとしたいびきをかいている。

彼は生後3か月で父親を失った。その後、母親は精神喪失状態になり育児が手につかなくなかった。そして、生後しばらくの間、彼は叔父の家で育てられた。「自分はもらわれた子どもではないか」、という疑念が彼の脳裏から離れることは無かった。家族の態度が腫れ物に触るかのようだったからである。父親は起業家で事業に成功し、生前の生活は豊かであった。カメラが趣味で姉たちの写真だけはたくさん残されていた。祖母は辛い人生を歩んできたため、何に対してもグチを言うことが習慣となっていた。テレビ番組に対しても文句を言っていた。姉たちは祖母の影響からか口が悪く、誰彼となく批判することが趣味のようだった。

母親は優しかったので、人のことについて何か言うことは滅多に無かったが、父親の居ない三人の子どもを抱えて生きていく環境の中で、常にどこか悲しみをたたえているような瞳をしていた。私はそんな家庭環境が嫌だったので、一人で遊ぶことが多かった。特に本を読むことが好きだった。本の中の様々なストーリーは、彼を行なったことのない世界に連れて行ってくれた。彼の唯一の安住できる場所は、本の世界にしかなかった。彼は澱んだ家の中の空気が苦痛だったので、道化を演じた。おどけてばかげたことをやれば、家族のみんなが笑ってくれる。その一時だけ彼は安心感を得られた。しかし、道化を演じれば演じるほど、彼の心の奥底には泥のような絶望感が、広がっていくのであった。

彼は、大人になってからも基本的に人を信用することができなかった。幼少期より人の心の裏側の澱んだ本音を日常的に見たり聞いたりしてきたからである。彼の家は2階家で1階は倉庫だった。トイレは1階にしかなく、深夜に一人でトイレに行くのは幼い彼にとっては勇気が必要だった。しんと静まり返ったトイレで彼は考えていた。

「いま幽霊が出てきたらどうしよう、この世界で一番怖いのは何だろう。幽霊が出てきても多分おどかさすだけだよなあ、もし人殺しが来たら僕は殺されるよなあ、幽霊はいきなり殺すことはないから、やっぱり一番怖いのは人間だ」それが、8歳の幼い彼の結論だった。

彼は大人になるに連れ、自分の力だけを信じるようになっていった。それは、彼のビジネスの中でさらに強化されていった。彼もまた父親のように起業家として独立することを志した。独学でビジネスの全てを学び、自宅の土地を活用してホテルを建設し、不動産投資家として彼は資産を築いた。誰にも頼らなかつた。利用できるものは何でも利用した。目的のためには、違法すれすれのことさえできる人間であることを彼は自覚した。

「自分の交渉力があれば不可能なことは何もない。もう、恐れる存在は何もない。」

そして、いま高層のタワーマンションにいて、何ひとつ視界をさえぎることのない世界を見下ろしている。富士山が夕陽を浴びて紅く染まっている。子どもはもう6か月になった。彼は片手で軽々と娘を抱きかかえた。

「あれが、フジサン…」と我が娘の黒い瞳を見つめながら、彼は語りかけていた…

日本の結婚式では定番のスピーチがある。人生には三つの坂がある。上り坂、下り坂、そして、まさか。その「まさか」が、彼のもとに突如出現した。

母親は自分の葬儀費用として、長姉の名前で口座を作成し貯金していた。その返還を求める手紙が、長姉が雇った弁護士より届いた。そしてしばらくして、長姉と次姉から相続の配分を巡り異議を申し立てるために、連名で彼に対して訴訟を起こす旨の書面が届けられた。「まさか」、自分の身内から裏切られるとは思ってもみなかった。彼は動揺していた。

[以上となります。よろしくお願いたします]